

PHANTMAS

ファントマ

～クロエのとある一日～



カランカラン

街外れの小さな家に珍しい来客があった

「おじゃましま〜す…」

「あら、クロさん いらっしやい。」

「あっクロねえ！」



クロエは駆け寄った少女を抱きとめ、わしゃわしゃと頭を撫でる。

「久しぶり～また大きくなったな～！」

「今日はどうしたの？」

「ふっふっふ、オバケをやっつけに来たのさ」

一人暮らしのクロエは人々に危害を加える「オバケ」を狩って生計を立てている。この街外れの家に「オバケ」が出たと聞いて、クロエは放っておけなかった。



「悪いわねえ…このあたりにも出るようになって…」
「なあに、まっかせてください！お仕事ですから！」
クロエの腕は確かで、その明るい性格から人々に信頼されている。
「クロさんは偉いわねえ。ちゃんと学校に通いながら働いて…困ったらいつでも頼ってね。」
「ア、アハハ…ありがとうございます…」
クロエは少しバツが悪そうに頬をかく。
学校の成績は、ほとんど体育で保っているようなものだったからだ。





森の入り口が二つ、真っ暗な口を開けている
クロエは剣を持ち、身を引き締めた。
「さて、どっちにいるかな…」

ROUTE 1

クロエは左の道を進んだ。

(いるな…)

森に入ってから、しばらく背後に気配がつきまとっている
どうやらオバケに狙われているようだ。

オバケは不定形な体を持ち、様々な形態をしている。
そして、その触手に侵された者は身体がオバケに変わり、
仲間にされてしまう。

クロエは平静を保ち、距離が十分に詰まるのを待つ…



オバケが十分に近づいたところで、クロエは背後を斬った。
しかしオバケは飛び上がって回避し、刃は空振る。
(くそっ！)



(どこだ…どこから来る…！？)

次はどの方向か…クロエは木々に隠れたオバケの
気配に注意する。

そして、とうとう真下から伸びる触手に気付くことが
できなかった。

無防備なクロエに触手が忍び寄る…





「っ…!!？」

クロエは分裂したオバケのトラップにかかってしまった。
(しまった…！)

じたばたともがくが、腕も足もガッチリと拘束されてしまった。
触手がタンクトップをずらし、解放されたクロエのそこそこ大きい乳房はたゆんたゆんと勢い良く揺れた。
オバケは背後でケタケタと笑みを浮かべている
「こいつ…！」

「や、やめろおっ！このエロオバケ！！」
抵抗できないのをいいことに、触手が乳首に絡みつく。
(くそっなんていやらしいヤツだ…っ！)
クロエは必死でもがくが、固い拘束からは逃れられない。
触手はピコピコとからかうようにはじいたり、からみついたり、こねくり回したり…
「やっ…、きゃあああんっ！」
甘美な刺激に、クロエはとうとう女の声を上せさせられる。
「こっこいつ…っ！やめろ…っ！離れろっ…！」
クロエは誰もいない森で乳房を晒されたぐらいでは気にしないが太さはあるが、
執拗に弱点を弄ばれ、焦りを見せ始めていた。





ずにゆにゆ…

「ああ…っ！く…っ！」

交接触手を秘部に押し当てられ、全身におぞ気が走る。

「や…やめ…ろお…っ!!」

ぶっとい触手がにちゅにちゅと交接を試みるが、クロエは全力で股を閉じ、挿入を拒む。

(こんな…オバケなんかに…っ！)

そんなクロエを解すように、触手が乳首にいやらしく絡みつく。

脚を開かないと、このねちっこい乳首責めからは解放されないようだ。

「く、くう…♥ぜ ゼッタイ開かないからな…！」



触手の先端が形を変え、ちゅつと吸い付く

「きゃっ！」

乳首を包み込む感覚に、情けない声上がる。そして

きゅ~~~~~つ

「ぎゃっ ぎゃああああっ！！？」

オバケの触手は乳首を掘り起こすべく、吸引を始めた。

(な、ナニコレナニコレ…っ！？無理矢理…！！？)

必死で耐えるが、真空状態の触手に強制的に吸い出され、抵抗しようがない。

「やっ♥ちょっ…あっ♥やっ…やめろっ！」

吸引によって乳首は、最大勃起まで強制されていく…

「ツツツ…！？ツはあああああ…っ！！？」

クロエの乳首は、あっという間に最大限まで勃起させられた。

(ひ…卑怯…っ♥)

小ぶりだが長めの乳首が触手の中でビクン、ビクンと脈打つ。


触手はクロエに止めを刺すべく、吸引の圧を変えて、吸い出し、弄ぶ

きゅ~~~~~つきゅつ きゅキュッキュツ ギュウウ~~~~~つ…

「やっ♥ちょ…あっ♥なっ…やっ…やめろ…っ！あっやめてやめてお願い

開くっ…ひらくからあああっ！！！」

細長い弱点を突かれ、クロエはたまらず服従する。



誰もいない森に抽挿音が響く。
クロエは森に入って数分でオバケに侵されていた。
(くそっ…こんな奴に…っ！)
さらに若干コンプレックスでもあった長乳首を晒され、屈辱に喘ぐ。
このままではオバケにされてしまう。クロエは何とか脱出する方法を考える。

「くっ、おっ、おっ！おっ♡ほっ♡」

しかし乳首を鞭で打たれる度、性器に突かれる度、頭が快樂一色になり、何も考えられない。ただ、倒れたら状況はよりマズくなることだけは本能的にわかっていた。

(やらっ れて たま…っ♡るか…っ♡)

クロエが今すがりつけるのは、ひたすら耐えて「倒れない」ことだけだった。



「お…お…っ！！？」

オバケの触手が見事に矯正された乳首を見せびらかすようにコリコリと弄ぶ。

「お…っ！おおお…っ！！？」

最早ソフトタッチだけで全身がふやけてしまいそうな快樂が全身に駆け巡る。

(あっ…♥や…やめ…だめ…っ…♥)

今度はピコピコ弾くのではなく、じっくりねっとりした手つきで官能的に先端を撫で回す。

(きゅ…急に…そんな…や、やるならピコピコにしろお…っ！♥)



切なくなったクロエを追い詰めるようにオバケは舌を出し、レロォ…と首筋を舐める

「く、くお…っ♡」

全身にぞくぞくとおぞ気が走り、乳首をより一層固くする。

(ヤ、ヤバイ…このままじゃ…っ♡)

最早クロエの我慢は限界であった。オバケに身を任せて楽になってしまいたかった。

しかし依頼主である優しい人々がよぎり、最後の最後で踏ん張った。

(た、倒れたら…！倒れたら負けだ…！)



そんなクロエの意志を打ち砕くかのように、触手は先端を変形させる。

サワワッ サワサワ…

生糸のようにか細い触手が繊細な手つきで乳首を根元から擦る。

「く…っ ひ…っ!？」

触手の切っ先はじつくりと先端へと移動していき…

そわそわそわああ…っ

(た、たお…っ♥)

乳首を頂点まで擦り上げた。

この世のものとは思えぬ刺激に、乳房に脂汗がにじむ。



(き…っ 気が狂う…っ♥)

クロエの長身の乳首は格好の標的だった。

極細触手は乳首の横っ腹を存分にこそぐる

くすぐり終えたかと思えばまた根本からじっくり…

付け根から横っ腹、そして頂点まで 触手一本一本の感覚がハッキリと
わかるほどじっくりゆっくりたっぷりくすぐり上げる。

(だ、だめ 力、抜け)

森の近くにはあの小さい家があるのに、自分までオバケになってしまっ
たら…最悪の事態を考え、踏ん張る。しかし
しよわしよわしよわ…

(あ、だめ、何も 考え——)

急所を丹念に責められ、クロエは屈した。

オバケはへこへこと腰を降り、倒れたクロエを犯す。
(く、くそお…こんな…っ♡オバケに…っ♡)
乳首を弄ばれ、犯され、クロエは完全に屈服させられた。
オバケに最大限の屈辱を与えられたクロエは呻くことぐらい
しかできなかった
「うう…っ♡ひやめろおっつ…♡♡その触り方…っ♡」
細かい触手で乳首を責めると抵抗できなくなるのを学習し
たオバケは執拗にくすぐり回す。



ピストンも徐々に早まっていく。オバケはもう達する直前のようだ。最悪の事態に、クロエは恐怖する。
「ひゃ、ひゃ め…！！」
制止する暇もなく、オバケはクロエの中に体液を吐き出した。
ビュッ！ビュクッ…ビュ~~~~…
(出…出された——…！)
クロエの表情は凍り付き、絶望する。
(く…そ…っ！オバケになる前に…せめてコイツを…！)
ここまでされて、ただで負けるわけにはいかなかった。
腰砕けになりながらも地面に突き刺さった剣に向かって這いずり進む。





クロエの意思を感じ取ったオバケは、胴に絡みつき、下の穴を犯した。

「——…!!!? あっ ひっ いやっ…!!!」

ジュポンジュポンと激しい音を立て、上下ともテンポよく犯す。

「あっ いっ おおっ♡♡」

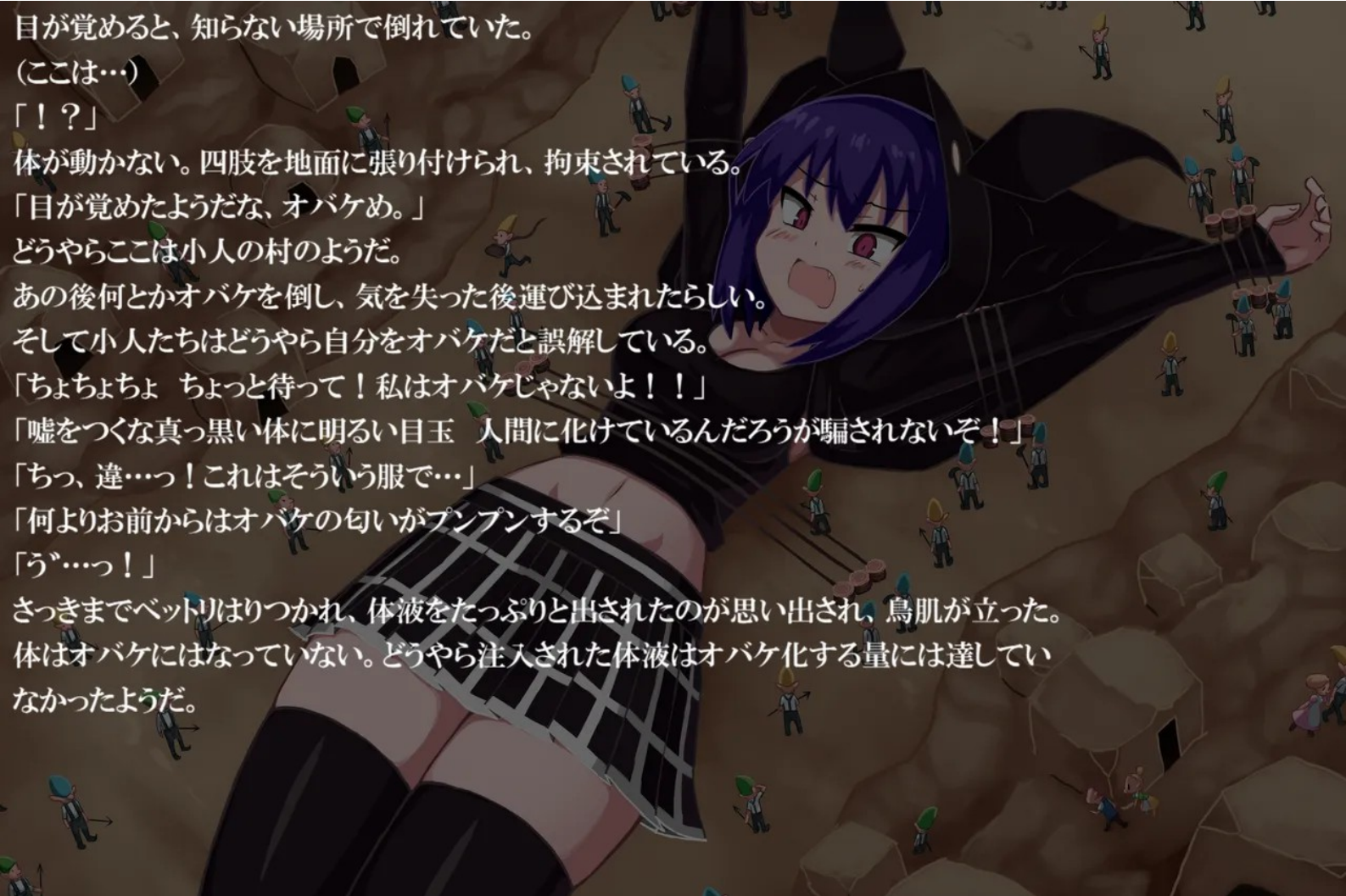
オバケが達するまでに剣を取らなければ、さっきの2倍注がれてしまうだろう。

「んっほおお…つつ♡♡♡」

クロエは最後の最後で新たな快楽を開発され間抜けな声を上げさせられる。

(ズ…ブッタ切ってやる…!)





目が覚めると、知らない場所で倒れていた。

(ここは…)

「!？」

体が動かない。四肢を地面に張り付けられ、拘束されている。

「目が覚めたようだな、オバケめ。」

どうやらここは小人の村のようだ。

あの後何とかオバケを倒し、気を失った後運び込まれたらしい。

そして小人たちはどうやら自分をオバケだと誤解している。

「ちよちよちよ ちよっと待って！私はオバケじゃないよ！！」

「嘘をつくな真っ黒い体に明るい目玉 人間に化けているんだろが騙されないぞ！」

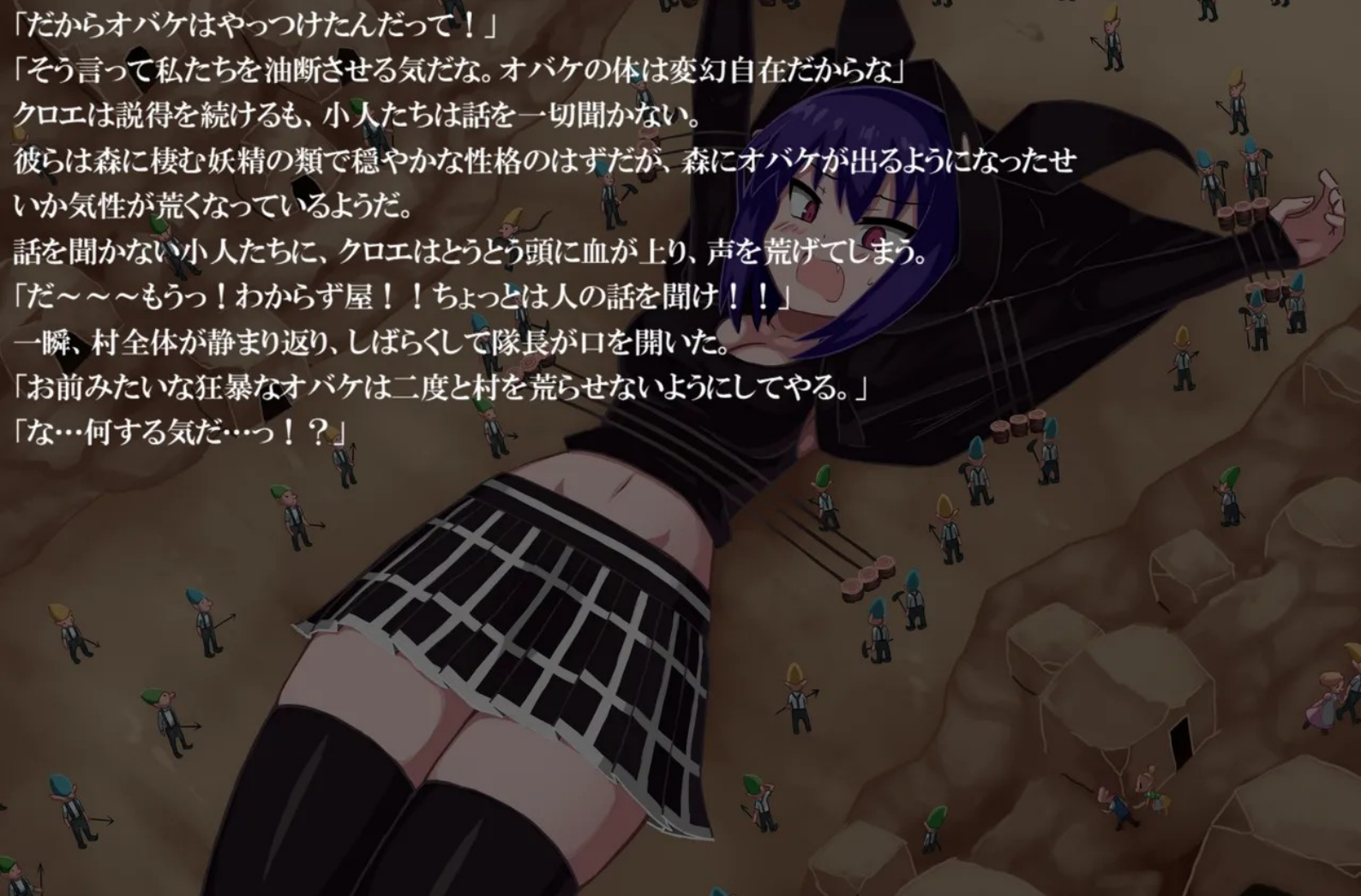
「ちっ、違…っ！これはそういう服で…」

「何よりお前からはオバケの匂いがプンプンするぞ」

「う…っ！」

さっきまでベツリはりつかれ、体液をたっぷりと出されたのが思い出され、鳥肌が立った。

体はオバケにはなっていない。どうやら注入された体液はオバケ化する量には達していなかったようだ。



「だからオバケはやっつけたんだって！」

「そう言って私たちが油断させる気だな。オバケの体は変幻自在だからな」

クロエは説得を続けるも、小人たちは話を一切聞かない。

彼らは森に棲む妖精の類で穏やかな性格のはずだが、森にオバケが出るようになったせいか気性が荒くなっているようだ。

話を聞かない小人たちに、クロエはどうとう頭に血が上り、声を荒げてしまう。

「だ〜〜もうっ！わからず屋！！ちょっとは人の話を聞け！！」

一瞬、村全体が静まり返り、しばらくして隊長が口を開いた。

「お前みたいな狂暴なオバケは二度と村を荒らせないようにしてやる。」

「な…何する気だ…っ！？」



「よし、かかれ!!!」

「ぎゃ ぎゃあああああ!!!」

ぞくぞくぞくぞくぞくぞく

全身のさぼられる感覚にクロエは悲鳴を上げる。

(きっ…気持ち悪い…っ!!)

首スジに、わき腹に、スカートの中に、乳房に…小人が虫のように入り込み、こちょこちょ撥る。

「ああっ!こら!やめろっ!そんなとこ触るなあっ!!!」

「反応が怪しいな」「このあたりオバケのニオイが濃いぞ」「もっと調べるんだ」

小人たちはオバケが多く触れた部分…性感帯に群がる。

「ああっ!や…やめろおっ!変なことするなアアア!!!」

クロエの乳首は手先が器用な小人たちに揉み込まれると、あっという間に勃起上がった。

(ク、クソ…っ♥オバケに変にされてるのに…!)

「あっ♥きゃっ、うああっ♥」

数人がかりでゼリービーンズのように膨らんだ乳首を舐め、つつき、くすぐり…



クロエはくねくねと悩ましく腰をくねらせ、官能的な動きで悶絶する。

「どうだ、正体を吐く気になったか？」

「だ、だから…っホントに、違…っ♥」

「ほう…まだ強がるか」

乳首の先端を思い切り攪り、舐める。

こちよこちよこちよこちよこちよぺろぺろぺろぺろぺろ…

(っ…♥うそっ…小人なんかに…っ！！)

クロエの身体がビクンビクンと大きくはね上がり、えびぞりで絶頂した。

「っあ…！ん…っ、ふくっ…♥うらん…っ♥♥あっ…あっ… あああっ♥♥♥」

達した後も甘い余韻に痺れ、しばらく痙攣する。

「こいつっ！あばれるなっ！」

横腹の小人がしがみつき、脱力させる。

「ふ、ふああっ♥違あ…っ♥」

小人たちはオバケの濃いニオイを嗅ぎ当て、クロエの股間部分に群がっていた。

「ええっ？そろそろ正体を吐いたらどうなんだ？」

クリリスをちくちくとつつかれ、尋問される。

「ち、違うんだ…っ♥私は…や、やめ… き… っ!!?くひいいいつ♥♥♥」

「よし いいヅ。やはりココがポイントみたいだな。もっと責め立てろ。正体を暴いてやれ。」

小人たちの手は下着の中にまで伸び、入り口をちよこちよこことつつく。

「やっやめろ…まさか…おまえら…！」

「くく…どうやらココが弱点のようだな…」

クロエは激しく嫌な予感がした。脚を閉じると、

小人たちは容赦なくクリをつつく、つつく、つつく

「あ… く… くひいいい…っ♥♥♥」





「おーえす！おーえす！」

小人たちが綱を引くと、クロエの足は開脚していく。

「あ や、だめ、やめて、おねがい…」

これから何をされるか想像すると、おぞ気が走った。

「今更しおらしくしたって無駄だ。さんざん村を荒らしたお前には、一番苦しい拷問を与えてやろう。…突入！！」

隊長が号令をかけると、小人は一斉に下着に潜り込む。

「いいいやだあああっ！やめろおおおっ！！」

クロエは絶叫するが、なすすべなく下着に侵入される。

「ち、違うんだってええ！私は、オバケじゃ…！」

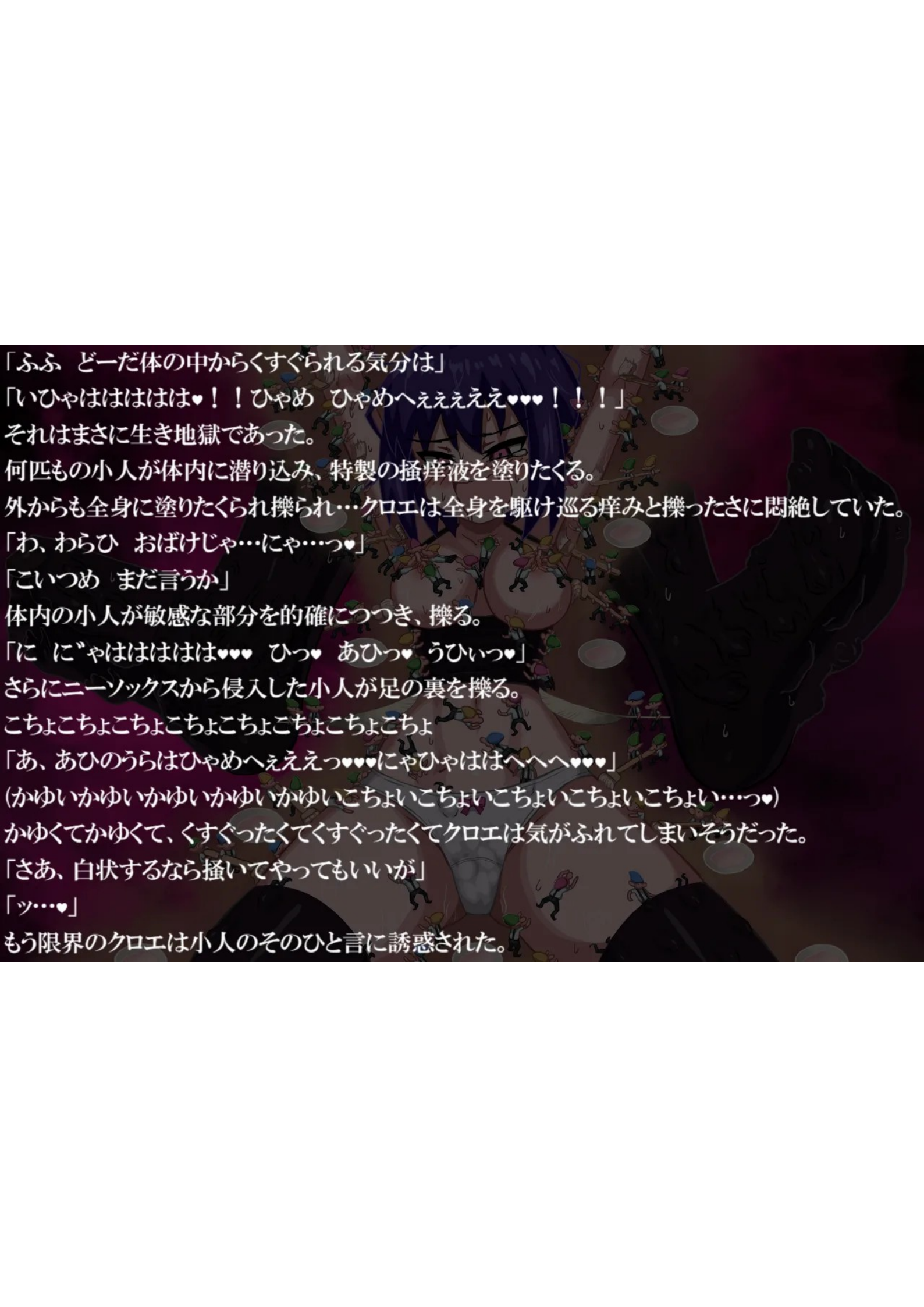
「よ～し効いてるぞ、その調子だ。」

小人たちはクロエの声を聞く気すらない。

(くっくそおおおっ！なんて言えば信じてもらえるんだ！?)

必死に考えるクロエをよそに、小人たちは次々と下着に入り込む…





「ふふ どーだ体の中からくすぐられる気分は」
「いひゃははははは♥！！ひゃめ ひゃめへええええ♥♥♥！！！」
それはまさに生き地獄であった。
何匹もの小人が体内に潜り込み、特製の搔痒液を塗りたくる。
外からも全身に塗りたくられ擦られ…クロエは全身を駆け巡る痒みと擦ったさに悶絶していた。
「わ、わらひ おばけじゃ…にゃ…っ♥」
「こいつめ まだ言うか」
体内の小人が敏感な部分を的確につつき、擦る。
「に に”ゃははははは♥♥♥ ひっ♥ あひっ♥ うひいつ♥」
さらにニーソックスから侵入した小人が足の裏を擦る。
こちょこちょこちょこちょこちょこちょこちょこちょ
「あ、あひのうらはひゃめへえええっ♥♥♥にゃひゃははへへへ♥♥♥」
(かゆいかゆいかゆいかゆいかゆいこちょいこちょいこちょいこちょいこちょい…っ♥)
かゆくてかゆくて、くすぐったくてくすぐったくてクロエは気がふれてしまいそうだった。
「さあ、白状するなら搔いてやってもいいが」
「ッ…♥」
もう限界のクロエは小人のそのひと言に誘惑された。

「…わ、わらひっ…わらひが、おばけれしゅ…っ♥」

最早今のクロエには、何もかもがどうでもよかった。

一刻も早くこの痒さから、擦ったさから解放されたかった。

「よーし、とうとう吐いたな！お望み通り、たっぷり搔いてやれ！！」

かきかきかきかきかきかきかきかきかき かりかりかりかりかりかりかりかり

「か…——っ♥ ひ……っ♥ く……っ」

内側から、外側から、敏感になったところを一斉に搔きむしられ、

クロエは声にもならない声を上げ、昇天した。

「あ…はあ——っ♥はあ——っ♥も…もう…ゆるし…っ」

「くくく、とうとう正体を吐いたな。これからもっとじっくりたっぷり擦ってやる。」

「そ、そんなあああっ♥♥♥」

小人たちは怒りはそう簡単には収まらない。怒りのはげ口として、最大限クロエを苦しめるつもりのような。オバケを狩ることができたクロエだったが、小人たちが誤解に気づくまで、何日も擦られ続けたのだった。

ROUTE 2

クロエは右の道を進んだ。

どこまで進んでも変わらない景色。同じ所をぐるぐる回っているようだ。
森には慣れているクロエだったが、この領域に異様さを感じていた。
(おかしいな。鼻が利かない…それにこんな場所あったかな…?)
そばにある樹に腰を掛け、あれこれ思案しているクロエに陰が忍び寄る…

「えっ？あ、ああっ あ、あっ…！」
虚を突かれたクロエは見る見るうちに絡め取られる。
腰を掛けた樹は、擬態しているオバケだったのだ。
(こ…、こんな、でかいヤツ…！？聞いてな…！)
どうやらこの領域はレベルの違うオバケの棲家のようなだ。
ニオイが濃すぎて、クロエの鼻は馬鹿になっていたのだ。





(ヤ…ヤバイ…！！逃げないと…やられる…！)

怖いもの知らずのクロエは、初めて敵に恐怖した。焦ってもがくが、触手が一つ絡めば二つ、三つ、と次々掴まれていく

(や…やだっ…！)

邪な触手が服の中にまで潜り込み、脚に、乳に、クロエの柔肌に絡みつく。触手の動きはクロエをどうしようとしているか、明らかだった。

「っ…！」

触手が谷間に潜り込み、「パイズリ」のようにピストン運動する。

(ヤバイ…っ！ヤバイヤバイヤバイ…っ！)

逃げられないクロエはオバケに引きずり込まれていく…



「あ…っ うく、あああ…っも…ゆ 許して…っ！」

森の中に少女のうめき声が響く。

そこには無残に敗北したクロエの姿があった

もう何度鞭で打たれ、何度絶頂させられただろう。

勝気なクロエですら抵抗する気が起きなくなるまで一方的に痛めつけられ、撻られ、犯された

クロエの精力を養分に育った植物が乳首を吸う。

「あっ やっ♥ んう♥♥」

精力を欲しがら植物は、ちゅうちゅうとクロエから力を吸い出そうとする。

この触手は存分にクロエを脱力させた。

ごぼっごぼっちゅっごぼっ

「が…っ！ か、は、らめ…っ！！」

さらに触手が両穴を激しく突き回すと、クロエの中にぞくぞくと何かが昇ってくる

(っあ…ダメ…また…っ♥)

ビク、ビクンと体のはね、絶頂。大量の体液が注ぎ込まれ、また一步オバケに近づいた。

(ヤ…ヤダ…オバケになりたくない…っ♥)

絶望したクロエに、無数の足音が近づく。

(—あ…ヤダ…ウソ…)

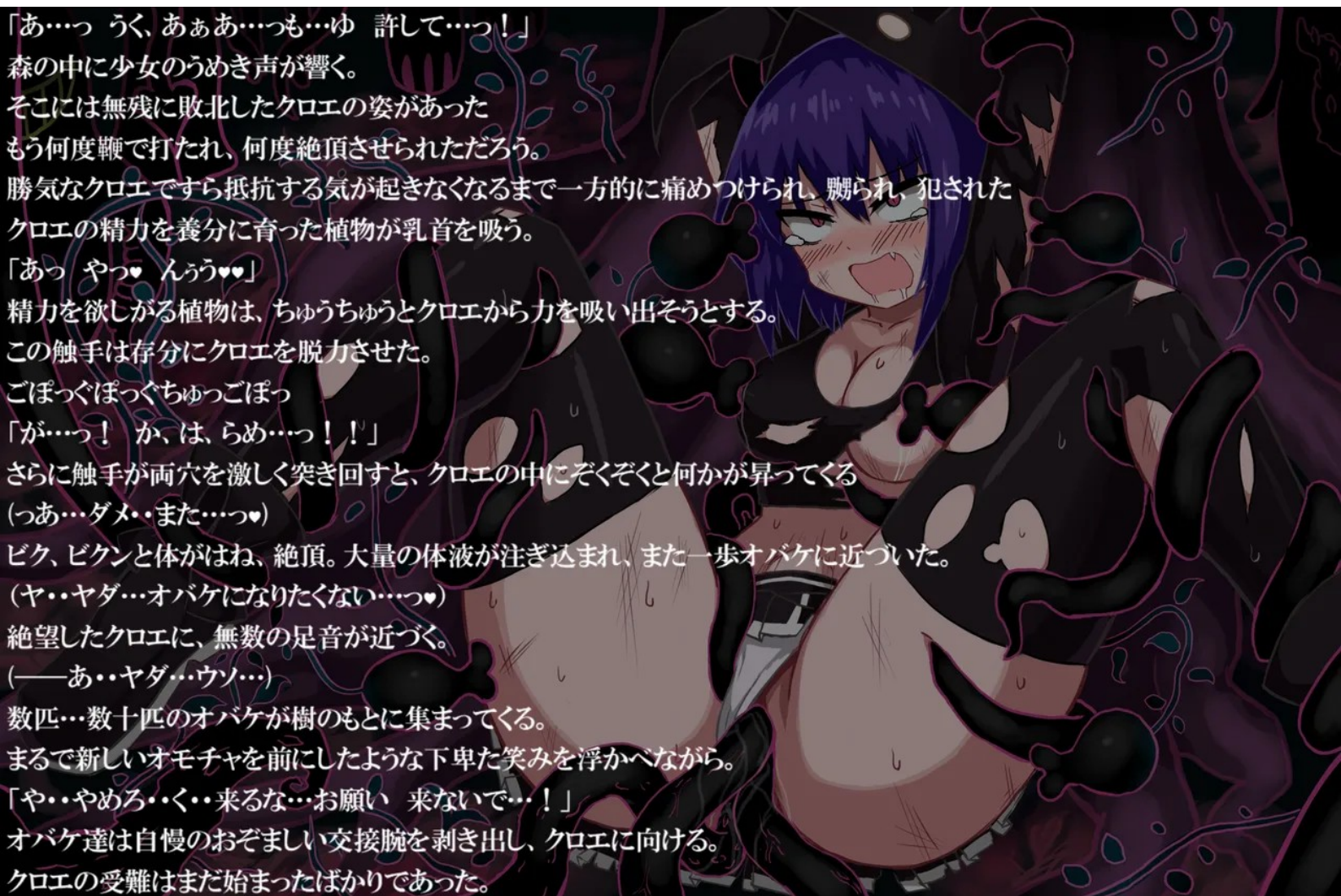
数匹…数十匹のオバケが樹のもとに集まってくる。

まるで新しいオモチャを前にしたような下卑た笑みを浮かべながら。

「や…やめろ…く…来るな…お願い 来ないで…！」

オバケ達は自慢のおぞましい交接腕を剥き出し、クロエに向ける。

クロエの受難はまだ始まったばかりであった。



「やっ…やめっ…！そんなの、一度に、無理… あ”…っ や”…っ♡やめっ、あ”あ”あ”あ”あ”っ♡♡♡」

森に少女の声がひたすら響く。しかしその声を聴く者は誰もいない。
道に迷い込んだ少女は無残にもオバケにされたのであった…

END

twitter: @mattanq













